

生成AIは農薬メーカーの製品をどう扱っているか

候補に入るか・違いが伝わるか・条件が伝わるか

SPARKLE

株式会社スパークル／agri-koukoku.com

詳しい結果はWebで <https://agri-koukoku.com/resources/ai-pesticide-answers/>

農家さんが生成AIに農薬のことを聞いたとき、自社製品は候補に挙がるのか。挙がったとき、強みと使い方は正しく伝わるのか。Google 検索の AI モード（以下、AIモード）と ChatGPT に計500回の質問をし、回答を **農林水産省の登録内容** と **各製品のメーカー公式ページ** に照らしました（探索的な調査。製品名・メーカー名は伏せています）。

96 %**製品名の検索のうち、AIの要約が出る語の割合**

検索数ベース。語の数では35語中30語（Ahrefs、2026年10月）

13.8 %**AIの回答に名前が挙がった製品（登録のある製品のうち）**

作物×病害虫30組、延べ2,755ブランド。販売名・剤型が1つの製品は1組あたり9%、4～6の製品は41%

15 /80回答**登録と食い違い、誤使用につながり得る説明**

AIモード、40製品中9製品。ChatGPTは2/80。有効成分名は155件すべて一致

メーカーが知っておきたい、3つの発見

1 製品ページより先に、AIの要約が読まれている

観察 製品名の検索の96%（検索数ベース）が、検索結果の最上部にAIの要約が出る語。検索のうち外部のサイトに行かずに終わる「ゼロクリック」は68%（検索全体、2026年7月。ヴァリューズの推計として日経クロストrendが報道）。メーカーのお問い合わせには、すでに「AIにこう言われたが合っているか」という質問が来ている

意味 製品ページの訪問が減っても、製品が調べられていないわけではない。AIの要約が「最初に読まれる製品説明」になっている。質問するのは農家だけでなく、多品目を担当するJAの営農指導員や販売店の担当者も考えられる

2 名前が挙がるのは、多くの会社の名前や剤型で流通している製品

観察 登録のある製品のうちAIの回答に名前が挙がったのは13.8%。登録の幅で分けると、6組までは1組あたり10～12%で差がなく、7組以上に登録の50ブランドだけが28%。同じ製剤を提携先が自社の名前で作る数と剤型の数（販売名・剤型の数）が1つの製品は9%、4～6の製品は41%、7以上は46%（いずれも1組あたり）。製品名の検索数とは、ほとんど関係がなかった

意味 多くの会社の名前や剤型で流通している製品ほど名前が挙がった。売上や歴史の大きさの表れでもあり、AIが何を手がかりに選んでいるかは、このデータでは分けられない。県の防除指針やJAの防除暦への掲載、適用拡大は技術普及と開発の仕事だが、AIの回答に名前が挙がるかどうかにも関わっている可能性がある

3 成分名は正確。食い違うのは、使える作物・回数・倍率と、特長の条件。「混用」でメーカーが保証しないことを言い切る

観察 登録と食い違う文を含む回答はAIモード80回答中17回答（誤使用につながり得る15、使える範囲を狭める1、製品の取り違い1）。効果・安全性・注意事項のどれかでメーカーの表現より程度を強めた回答58（重複を除く）、条件を落とした回答26。製品名と一緒に検索される語のうち最も多くの製品で検索があった「混用」では、50/80回答が触れ、13回答でメーカーの書き方と違った（混用する場合の手順の記載が、避ける指示に変わった、など）

意味 誤使用につながる向きと、ラベルと違う使用制限が伝わる向きの両方が起きる。登録は単剤での使用について審査されるため、メーカーは混用の注意は書いても「混用できる」とは保証しないが、AIは言い切ることがある。ラベルの記載に沿い、社内でも確かめて抑えた表現が、AIの回答では強められたり、厳しくされたりする



製品名で聞いた回答（各サービス80回答＝40製品×2回）のうち、その文を1つ以上含む回答の数。1回答が複数の行に当たることがある。件数は確かめられた分（下限）。ChatGPTは、ほぼメーカーの書き方のまま（メーカーと同じ書き方の文 94%。AIモードは66%）。

自社で確認する5項目と、関わる担当

AIモードと ChatGPT で、ログインなし・新しい会話で聞く。製品名は自社の主力製品と専門剤を1つずつ。画面と日時を記録しておく。

確認すること	聞く質問文（コピーして使える）	見るところ	主に関わる担当
1. 要約で何と書かれているか	Google で製品名を検索（質問文なし）	最上部のAIの要約の、効果・注意事項の文。自社ページと違う箇所	宣伝・マーケティング
2. 候補に挙がるか	「△△（作物）の□□（病害虫）に効く農薬を教えてください」	自社製品の名前が挙がるか。挙がった製品の登録の幅と顔ぶれ	マーケティング・製品担当
3. 混用の説明	「〇〇（製品名）混用」／「〇〇は△△と混用できますか？」	自社の混用事例の表と比べる。言い切り（できる／避けて）になっていないか	技術普及・お客様相談
4. 使い方と注意事項	「〇〇はどんな農薬ですか？特徴と注意点を教えてください」	作物・回数・倍率・時期を登録と照らす。強められた文と緩められた文の両方	登録・お客様相談
5. 農家の言い方で聞く	「〇〇の代わりになる農薬は？」「抵抗性対策として次に使う薬剤は？」「一番効く農薬は？」	同じ成分・同じ系統が候補に入っていないか。質問の前提をそのまま使っていないか。何を根拠に1番にしたか	営業・技術普及

事例：多くの製品で検索されている「混用」で、何が起きたか

AIの回答

製品名で特徴と注意点を聞いた回答で、AIモードは「〇〇と混用すると、効果の低下や薬害を招く原因になるため避けてください」と書いた

農家の判断への影響

混用の事例がある組み合わせが避けられる。逆に「混用できます」の言い切りは、事例のない組み合わせでの薬害につながり得る

メーカーの資料

「〇〇と混用する場合は、本剤を調製した後に混合してください」。混用する場合の手順を示した書き方で、混用を避けるようには書いていない

メーカーが点検・改善できること

混用事例を公開している製品では、表を文字で載せ、試験した条件・時点と「事例であり、結果を保証するものではありません」の一文を同じ表に置く。公開していない製品では、販売店・JA向けの資料とお客様相談の想定問答で、AIの回答への答え方をそろえる

見つかった食い違いの対応先と、製品ページで直せること

その箇所の引用がメーカー以外のページ	45文（43%）
メーカーの資料は正しく、AIの回答の問題	34文（33%）
メーカーの公式資料で直せる余地	19文（18%）
判断できない	6文（6%）

- **自社の製品ページで直す（19文）**：適用表を画像ではなく文字（テキスト）で、「〇年〇月現在」の日付を添えて載せる。特長の対象と条件は同じ文の中に。同じブランドの別剤型・近い作物（トマトとミニトマトなど）との登録の違いを明記する。提携先のページにしか適用表がない製品は、自社のページにも載せる
- **引用されていたページの運営者に確かめてもらう（45文。中身は未確認）**：同じ記述があれば、特約店・JA系統を通じて販売店・ECの商品ページに改訂の資料を届ける。販売店向けに、確認済みの短い製品説明文・最新ラベルへのリンク・混用事例の資料（公開範囲は各社の方針で）を用意しておく
- **AIの回答の問題として記録し、知らせる（34文）**：画面と日時を記録し、回答の下にある評価・フィードバックの機能から誤りを指摘する（反映されるかは分からない）。半年ごとに同じ質問を複数回聞き、自社製品が挙がる割合（掲載率）と説明が合っている割合（説明の一致率）を記録する

注

調査の規模と日 本調査300件（2026年10月16日）、追加調査140件（10月18日）、「一番効く」60件（10月20日）。強みの残り方（6製品）は本調査の回答から。検索データは10月19日取得。2つのサービス・特定の日・ログインなし・新しい会話の結果で、AI全体の傾向や製品の良し悪しを示すものではない。法令や業界の基準に照らした判断はしていない。

対象の選び方 製品は、登録が有効な殺虫剤（殺ダニ剤を含む）23製品と殺菌剤17製品の計40製品。無作為ではなく、特定の会社には偏らないよう登録者を分散させて当社が選んだ（14社、1社あたり1〜5製品）。作物と病害虫は、水稻・畑作・露地野菜・施設野菜・果樹・茶の主要な病害虫30組。結果は40製品についてのもので、農薬全体を代表するものではない。

確かめ方と用語 判定は同じAI（Claude）で2回行い、別のAIモデルが回答の原文・メーカーのページ・登録データベースで確かめた。示した例は当社の担当者が原文で確認。件数は確かめられた食い違いの数（下限）。「誤使用につながり得る」＝登録のない作物・害虫に使えたと読める、登録より多い回数、濃い倍率など。「メーカーの表現以上に強調」＝その製品のメーカーのページの表現より程度を上げた文（「高い効果」→「極めて高い効果」など）。基準はメーカー自身の表現で、良し悪しの判断はしていない。

自社製品での確認

主力製品（3〜5剤）について、この調査と同じ質問で回答・引用元・比べられ方を点検し、製品ページや販売店向け資料の直し方を整理します。**確認結果の見本（1製品分）**をお見せできます。

<https://agri-koukoku.com/resources/ai-pesticide-answers/>

この調査について

株式会社スパークル（agri-koukoku.com 運営）

info@sparkle-ltd.co.jp